Supporting Information :

第27回名古屋大学博物館特別展記録 結晶展—研究者を魅了する多様な結晶たち—

The record of 27th Nagoya University Museum special exhibition Crystal Studies in Nagoya University —Fascinating Facts from the Laboratories—

梅村 綾子(UMEMURA Ayako)・宇治原 妃美子(UJIHARA Kimiko) 名古屋大学博物館

Nagoya University Museum, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa, Nagoya, 464-8601, Japan

図S1. 六面の連結パネル内容(展示パネル). ①枚目は「序章」として,来館者の岩塩標本に対する第一印象の「ことば」を テキストマイニングにより可視化した.



みなさんの第一印象の「ことば」から、 テキストマイニングにより スコアが高い単語を複数選び出し、 その値に応じた大きさで図示しています。 From your "words" of your first impression, using text-mining, we have selected multiple words with high scores and illustrated them in sizes according to their values.

0



ユーザーローカル テキストマイニングツール (https://textmining.userlocal.jp/) による分析

「正解・不正解にとらわれない」自由な見方に、そこから広がる世界や気づきがあるなぁ、と感じます。 ここに、もし知らない言葉、不確かな言葉、思いつきもしなかった言葉があれば、 是非調べたり、想像してみてください。 ・・・知を共有しましょう! It doesn't matter whether it's correct or not here. Rather, you may notice something new to you. If you have words you don't know, you're uncertain, or you've never thought of, please check them out, or imagine so. ... That's knowledge sharing! 2021年11月2日現在

As of November 2, 2021

「結晶」フィロソフィー 第1章

Crystal philosophy Chapter 1

・・・雪の結晶は、天から送られた手紙であるということが出来る。そしてその中の文句は結晶 の形及び模様という暗号で書かれているのである。その暗号を読みとく仕事が即ち人工雪の 研究であるということも出来るのである。

--「雪」の結晶に魅せられ、世界で初めて人工雪の結晶を作り研究した、中谷宇吉郎博士の言葉です。

結晶は、自然界のありとあらゆるところで見られます。例えば、グラファイト(黒鉛)とダイヤモン ドは、どちらも、私たちの生活にもおなじみの炭素の結晶ですね。しかし、見た目も使いみちも異なり ます。グラファイトは、鉛筆に使われているように、黒く柔らかい。一方、ダイヤモンドは透明でかた く、かたい石を切るのにも使われています。一体、どういうことなのでしょう?

その説明は、X線結晶学が教えてくれます。そう、病院で「レントゲン」と呼ばれている、あのX線で す。X線が結晶に当たると、結晶中の原子がそれをある方向にだけ散乱して、回折現象を起こします。 結晶中の原子が規則正しく並んでいるからです。

X線結晶学は、固体結晶の特徴を原子や分子レベルで説明する、いわば「結晶フィロソフィー」を確 立した一つの学問です。おかげで、「結晶」に直接または間接的に関わる学者にとって、その学問分野 は多岐にわたるとしても、結晶を語る上での共通言語・共通認識をもつことができます。

この結晶展を通じて、たとえ、「結晶」を"専門"としていない人にとっても、結晶の学術的な楽しみ 方を知ることになるのであれば、結晶の神秘性もやがて科学的な視点で飛び込んでくるようになる ことでしょう。

さて、グラファイトとダイアモンドの違いを、原子レベルで、結晶構造の視点で見てみるとしま しょうか(写真・右をご覧ください)。

凡ての事象を自分自身の目によって見ようとする願望、これがあれば必ずしも専門的の知識 や素質がなくともよいのである。しかしこのように自然現象を自分の服で見る人には、やがて

- 中谷字吉郎博士 「雪」より、





Development history of crystallography and the Nobel Prize winners Chapter 2

今から120年前の1901年、ノーベル賞が始まりました。その後、結晶に関係する研究に よって、50名以上の科学者がノーベル賞を受賞しています。そのことは、結晶学がさまざま な科学を支えてきたことを示しています。

はじまり Beainninas

1895年 レントゲンが直空放電管(クルックス管)からX線が放射されることを発目しまし た。「X(エックス)」の名の由来は、「未知」のもの、という意味です。X線の発見により、人類はそれ まで見たこともない世界を眼にするようになりました。レントゲンの妻の手を写したX線写真 も、当時は相当なインパクトだったことでしょう。こうした"分かりやすさ"は大切なことで、X 線の性質を利用した応用研究が多く実施されました。結晶に関する研究がまさにその一つです。





結晶学の礎を築く Laying the foundation for crystallography

1912年、ラウエが結晶にX線を照射したところ、X線が特定の方向に回折する現象を発 見しました。また、X線を使えば、結晶中の原子位置を正確に決定して結晶の三次元構造が 分かるようになる、として、1912~1913年に、ブラッグ父子が、岩塩やダイヤモンドの結 晶構造(原子配列)を解明しました。ところで、ほぼ同時期、物理学者でかつ随筆家としても 有名な寺田寅彦も、ラウエの実験に興味をもち、岩塩にX線を当てて蛍光板に回折像を写し 出し、ブラッグ父子と同様の考察を発表しています(Terada T., Nature, 91, 135-136 (2013); Terada T., Nature, 91, 213 (1913)).

diffracted in a specific direction. From 1912 to 1913. William and Lawrence BRAGG, father and son, elucidat the crystal structure (atomic arrangement) of rock salt and diamond, using X-rays. It was possible to accuratel He irradiated rock salt with X-rays and projected the diffraction image on a fluorescent screen, which was presented with the same consideration as BRAGG's in academic papers (Terada T., Nature, 91, 135-136 (2013) Terada T., Nature, 91, 213 (1913)).



15年 ノーベル物理学賞受賞





X線回新像 X-ray diffraction image Jeff Dahl, CD BY-SA 3.0, via Wikinedia Gr









タンパク質の結晶構造解明への挑戦

Challenge to elucidate the crystal structure of proteins

X線結晶学は、さらなる展開として、生命の謎に関わるタンパク質の結晶構造を明らかにしていきます。

タンパク質が結晶化することを発見

1926年、サムナーはウレアーゼ(尿素を加水分解により二酸化炭素とアンモニアに分解する酵素)が結晶 化することを発表し、続いてノースロップは、1929年に、消化酵素ペプシンが結晶になることを発見しまし た。ただ、その時点では、タンパク質の化学的性質や分子構造に関する知見が乏しかったため、それら結晶のX 線回折像は得られず、どのような結晶構造かは分かりませんでした。

初めてタンパク質結晶のX線回折像が明らかに

1934年、パナールと彼の下で研究を始めたホジキン(旧姓:クローフット)は、長さ2 mmのペプシン結晶 を、結晶化母液中と空気にさらした時の様子を観察し、結晶が変化していることを見出しました。今でこそ知 られていますが、タンパク質結晶は、容積の30~70%(平均50%)を結晶化溶媒が占めています。このため、結 品を空気にさらすことなく、ガラスキャピラリー(毛細管)に封入することにより、初めて、タンパク質結晶の X線回折像が明らかになりました。

Obtaining X-ray diffraction image of protein crystal for the first time In 1934, BERNAL and his student, HODGKIN (formerly CROWFOOT), observed pepsin crystals grew to 2 mm in a difference if the crystals were kept in crystallization mother liquor or exposed to air. As is now known, proteir



DNA 構造の 発表へ To announce the structure of DNA



DNAは タンパク質をつくるための設計団だと言われています タンパク質会成に必要で ある、アミノ酸の種類、数、配列、立体構造などの情報がすべてつまっているからです。



1952年、フランクリンによってDNA繊維からX線回折像が明らかになりました。この回 折像から、DNA鎖の基本的な物性(リン酸)が、何か「らせん構造」を持つものの外側にあるの だと予測しました。1953年、ワトソンとクリックは、このDNA繊維のX線データと模型製作 により、DNAを理論的に説明した立体構造「DNA二重らせん構造」を発表しました。 その後、1981年にDNAの単結晶が単離され、X線解析により、DNA二重らせん構造が証 明されました。



It is often stated as "DNA carries the genetic information for making proteins" because DNA contains all the information necessary for protein synthesis, such as the type, quantity, sequence, and three-dimensional structure of amino acids.



In 1952, FRANKLIN obtained an X-ray diffraction image from DNA fibers. From this diffraction image, the tructure of DNA was predicted as something like a helical structure, having the basic physical properties (phospharic acid) outside of the DNA strand. In 1953, WATSON and CRICK discovered the three-dimensional structure of DNA double helin, theoretically explained using the X-ray data of DNA

eers and its modering. hen, in 1981, a single crystal of DNA was isolated, and the X-ray analysis proved the DNA double helix.

結晶研究のさらなる発展へ Further development of crystal studies

1950年ごろから、ハウプトマンとカールは、数学と物理化学を組み合わせることで、 X線結晶構造解析の位相問題に取り組み、新しい結晶構造解析法を開発しました。従来 のデータ解析には時間がかかり、また結晶によって限界があったため、統計学的手法を 取り入れることにより、直接的に結晶構造を決定できるようになりました。

こうした結果、ますます多くの物質が生み出されています。

最近のものを抜粋するなら、2010年に、ガイムとノボセロフが、二次元結晶性物質グ ラフェンの発見でノーベル物理学賞を受賞、2011年にシェヒトマンが準結品の発見で ノーベル化学賞を受賞、2012年には、レフコウィッツとコビルカが、人体のほぼすべて の機能に関与している細胞表面の受容体タンパク質ファミリー(Gタンパク質共役受容 体)の構造解明でノーベル化学賞を受賞しています。

また、名古屋が喜びで湧き上がった2014年のノーベル物理学賞は、高効率な青色LED を実現させた赤崎勇特別教授、天野浩特別教授、中村修二教授に贈られています。ここで も、窒化ガリウムの結晶づくりが、その成功のカギを握っていたのです。





ル物理学賞受賞



●宇治原徽先生と石川晃平先生は、次世代パワー半導

体として期待されている炭化ケイ素(SiC)の結晶成長

法の開発に、AI技術を導入し、実用化に向け研究を進

めています。映像コーナー(プロジェクションマッピング)

にて、研究の様子をどうぞご覧ください。

第3章

をご紹介します。

瀬川泰知先生と坂本裕俊先生は、炭素物質である ナノカーボン(グラフェンやカーボンナノチューブなど) の部分構造である「分子ナノカーボン」を生み出してい ます。複雑な幾何学構造は、数学的なパズルのようなお もしろさがあります また そのパーツが組み合わされ ば、知られざる新機能の発現へとつながります。

●新田州吾先生は、青色LEDの材料である摩化ガリウム

(GaN)の次なる挑戦として、次世代パワー半導体として

のGaNデバイスが実現する未来社会の創造に向け、

研究を進めています。そのためには、GaNのきれいな

●杉本泰伸先生と永江峰幸先生は、名古屋大学が運用 するシンクロトロン放射光ビームラインの新しい測定 法の開発や装置開発の研究を通し、タンパク質の結晶

構造解析を進めています。その研究分野は生命科学、

医学、薬学、物質科学など多岐に渡っています。

5 Q 1

結果作りのための技術開発が伴うのです。

C permana

「結晶展」をダイジェストでご紹介

結晶の特徴的な形を見て、「結晶は、なぜこんなに対称的なのだろうか」と探究心をくすぐられるなら、やがて科学的

に結晶の本質を見るようになるでしょう。さらにその応用展開に期待するなら、結晶が私たちの未来社会を創造する

Chapter 3 Exhibition digest: Crystal Studies in Nagoya University

もう皆さんは、「これも結晶かしら」「あれも結晶かしら」なんて見方をお持ちでしょう。

さあここに、名古屋大学で遂行されている多彩な結晶研究のほんの一部をご紹介します。

ための有用な材料だとして見るようになるでしょう。

●吉田英一先生は、化石を包むタイムカプセル「球状コ ンクリーション」の形成メカニズムを解明し、さらなる 広用展開として、炭酸カルシウムのコンクリーション 化という技術開発を進めています。自然の産物である 炭酸カルシウムの結晶に、未知なる可能性を見出して います。

ODv. Hideka











図S2. 吉田英一先生のパネル内容(展示パネル).

天然鉱物の結晶「方解石」

"Calcite," a natural mineral crystal

吉田

. 英

教授

大学院環境学研究科兼任(環境地質学)名古屋大学博物館(資料基盤研究系)

方解石(calcite、カルサイト)は、炭酸カルシウム (CaCO₃)でできている鉱物(炭酸塩鉱物)の一種です。非常 に細かな方解石の結晶が集合し堆積することで石灰岩がで きますが、それが地中に埋没し圧力や高熱によって変成さ れると、結晶質石灰岩(石材名:大理石)となり、彫刻や建材 として用いられています。

天然に見られる方解石の結晶は様々な形がありますが、 その中でもよく知られるのは、マッチ箱を押しつぶしたよ うな平行六面体の形です。そのほかに、板状、柱状、犬牙(け んが)状などがあります。結晶の色は、一般に無色透明です が、含まれる元素によって、ピンクや紫、黄色などを呈する こともあります。

産業的にも、炭酸カルシウムは結晶材料として、セメント の原料や食品添加物などにも使われています。こうした有 用性から、炭酸カルシウムの結晶成長についての研究が進 められており、目的に合った大きさや形の炭酸カルシウム 結晶が合成されています。



Calcite is a type of carbonate mineral, made of calcium carbonate (CaCO_). When limestone, formed by the aggregation and deposition of very fine calcite grains and crystals, is metamorphosed due to high overburden pressure and geothermal heat after deeply buried, it becomes marble, commonly used for sculpture and as a building naterial.

Naturally found calcite crystals come in a variety of shapes, the most well-known of which is the crushed-like parallelepiped shape of a matchbox, Also, plate-shaped, columnar, and scalenohedral spine-like calcite crystals can be seen. The colors of the crystals are generally colorless and transparent, but they may be pink or purple to yellow, depending on the elements contained.

Industrially, calcium carbonate as a crystalline material is used as a raw material for cement, food additives, and others. Due to its usefulness, research on the crystal growth of synthesized calcium carbonate has progressed, controlling its size and shape suitable for their purposes

「球状コンクリーション」の成分も炭酸カルシウム!

The component of "spherical concretions" is also calcium carbonate!

古生物学者、化石研究者が地質調査で探し求める "丸い石"、その主成分も、方解石と同じ炭酸カルシウ ムです。炭酸カルシウムの丸い岩塊は、化石を数百万 年以上もの間、生きていた当時の状態のままに遺す ほどに丈夫であるため、言わば"天然のコンクリート" として「球状コンクリーション」と呼ばれています。

球状コンクリーションは、コンクリーション中の 生物遺骸からの有機炭素と海水中のカルシウムイオ ンが反応して生成した炭酸カルシウムが、周囲に堆 積した砂や泥の隙間を急速に埋めて、球状に成長し 固まったものです。

炭酸カルシウムの結晶だけでは、劈開によって脆 く割れやすいですが、砂や泥を含む地層の中で成長 したコンクリーションは、コンクリートよりも硬く 耐久性に富む性質を持っています。これらの球状コ ンクリーションは世界中から発見されており、それ らの成因に関する研究が進められています。







The "round stones" - paleontologist and fossil researchers are always looking for - whose main component is calcium carbonate. They are called "spherical concretions" because they are so strong enough to protect fossils inside the stones for more than millions of years, like "ultimate natural concrete."

Spherical concretions are formed in phases: firstly. carbon was produced from the organic matter of buried organisms after the decomposition, then calcium carbonate precipitated very rapidly by the reaction with the carbon (bicarbonate ion) and calcium ion contained in the sea water. Further, the calcium carbonate fills the grain pores between sand and mud deposits to cement and grow, and eventually solidify into a spherical shape

Calcium carbonate crystals alone are brittle and fragile due to cleavage, while concretions grown in the sedimentary formation containing sand and mud grains make themselves guite harder and more durable than concrete. These spherical concretions have been found all over the world and research into their origin and formation process has been underway

未来へ:地下空間活用への応用

Future perspectives: Toward the utilization of underground space by concretion

球状コンクリーションは、化石をきれいに保管する、自 然が作り出した"タイムカプセル"です。その「コンクリート よりも硬く耐久性に富む性質」に学び、炭酸カルシウムの コンクリーション化を人工的に再現しよう、と現在研究が 進められています。例えば、トンネルなどのセメントやコ ンクリート建造物の亀裂修復技術への活用が期待されて います。

さらに、最新の研究では、地下空間の活用に向け、コンク

リーション化の応用技術が開発されています。地下空間を

利用するには、地下岩盤中の割れ目や隙間から、地下水の

流出を防ぐことが必要ですが、それには、セメントやコン

クリートの耐久性以上の強度で、地下岩盤中の亀裂・隙間

ています。





Spherical concretions are nature-created "time capsules" that keep fossils as it was. Researchers have currently been trying to reproduce the concretion of calcium carbonate artificially, learning from its "harder and more durable properties than synthetic concrete." For example, they expect the technology to be used for repairing cracks in cement or concrete buildings.

Furthermore, in the latest research, the concretion technology has progressed, developing for the utilization of the underground space. In order to use the underground space, it is necessary to prevent the outflow of groundwater from cracks and pores in the underground bedrock; however, the strength should be stronger than the durability of man-made cement and concrete to seal the cracks and pores in the underground for more than thousands of years. Here, by the concretion technology, we expect that practical approaches, such as long-term sealing technology for deep boring holes to store carbon dioxide, to isolate radioactive waste, and to preserve energy in the underground, will become possible,

をシーリングしなければなりません。ここに、コンクリー ション化による、地下空洞の長期シーリング技術が実用化 されれば、二酸化炭素地下貯留のためのボーリング孔の シーリング、放射性廃棄物の長期地下隔離や、長期エネル ギー地下備蓄なども可能になっていくだろうと期待され 図S3. 杉本泰伸先生と永江峰幸先生のパネル内容(展示パネル).

生き物の体をつくる「タンパク質」

"Proteins" that make the body of living organisms

タンパク質は、生き物の体をつくるもとであり、体の 中でいろいろな働きをします。筋肉が動く、食べ物を消 化する、脳が働く、これらはすべてタンパク質が働いて いるからこそできることです。

タンパク質は、アミノ酸が連なった「ひも」状の高分子 です。一見「長いひも」ですが、"まっすぐ"ではなく、"折 りたたまれて"います。同じ種類のタンパク質ならば、そ の折りたたまれ方(=構造)は同じです。つまり、タンパ ク質の機能を正確に理解するためには、正しい折りたた まれ方、すなわち、タンパク質の構造を知ることが不可 欠です。"乱れのない"きれいな結晶を作成し、X線結晶構 造解析によりタンパク質の構造を調べていきます。





Proteins are the building blocks of the human body, and they perform various functions in the body. For exam muscle movement, food digestion, and brain response are

A protein is a macromolecule that consists of a long chain of amino acid residues. It appears like a long string: it is not straight but typically "folded." Because the same type of proteins shows the same type of fold, in order to accurately understand the function of proteins, it is essential to know the folded conformation, or the structure of proteins by means of X-ray crystallography.



Nagoya University Beamline for X-ray crystal structure analysis

X線結晶構造解析を行うためのX線発生装置にはいくつかの種 類がありますが、タンパク質の結晶構造解析には、「シンクロトロ ン放射光」がしばしば使われます。

シンクロトロン光とは、高速の電子が電磁石によって進行方向 を変えられた際に発生する光のことで、赤外線、可視光線、紫外線、 そしてX線までの広い波長領域の電磁波を含んでいます。

2013年に完成した「あいちシンクロトロン光センター(愛知県 瀬戸市)」には、X線結晶構造解析を行うための「名古屋大学ビーム ライン(BL2S1)」があります。名古屋大学が建設したBL2S1は、 タンパク質や有機・無機化合物などの構造解析により、生命科学、 医学、薬学、物質科学などの様々な分野で、大学・企業の幅広い研究 者に利用されています。

There are several types of X-ray source for X-ray crystallography. One of them is the synchrotron radiation, often used for protein crystal structure analysis.

Synchrotron light is emitted with a wide range of electromagnetic radiations from infrared rays to x-rays when electrons, moving at high velocity, are forced to change the direction under the action of a magnetic field.

Aichi Synchrotron Radiation Center (Seto, Aichi Prefecture) established in 2013 has operated the Nagoya University Beamline (BL2S1) constructed by Nagoya University for X-ray crystal structure analysis. Using BL2S1, research in various fields, such as life science, medicine, pharmacy, and materials science, has been carried out via structural analysis of proteins, organic and inorganic compounds by academic and corporate researchers.

タンパク質の構造研究

Structural analysis of proteins

アクチンの繊維化の什組みを解明

アクチンは、細胞の形状や動態の制御に重要な「細胞骨格」の主要な構成タンパク質です。球状アクチンモノ マーは、二重らせん状につながり、繊維状のアクチンフィラメントを形成します。アクチンフィラメントは、重 合と脱重合を繰り返しながら長さを変えるため、細胞の形状をダイナミックに変えることができます。しかし この特徴(長さがバラバラ)のため、これまで繊維状アクチンの結晶を作成することはできませんでした。

そこで、名古屋大学の武田修一博士(現岡山大学)らは、アクチンを繊維状に固定する特殊な"仕掛け"を利用 することで、繊維型アクチンの結晶を得ることに成功し、名古屋大学ビームラインにより、そのX線結晶構造 を決定しました。これをモノマー型結晶構造と比較することで、アクチンの機能を理解する上で重要となる、 繊維化の仕組みの一端が解明されました。

Revealing the mechanism of actin polymerization

Actin is a major component of the "cytoskeletal" proteins, which are essential for controlling cell shape and motility. Spherical actin monomers polymerize into a double-stranded actin filament. Actin filaments change their length through repeated polymerization and depolymerization, which allows them to change the cell shape dynamically. However, due to this characteristic (varying length), it has not been able to crystalize the filamentous actin.



アクチンフィラメントの形成

Thus, Dr. Shuichi TAKEDA (currently at Okayama University) and co-researchers at Nagoya University succeeded in obtaining the filamentous form of actin crystals by using a special "device" that fixes actin in the form and determining the X-ray crystal structure by means of the Nagoya University Beamline. By comparing the crystal structure of monomeric actin, the mechanism of actin polymerization, which is important for understanding the function of actin, was revealed

シアノバクテリアの光受容タンパク質の構造解析

ある種のシアノバクテリア(原核光合成生物)は、周囲に緑色光が多いときは、緑色光を吸収する光合成色素 タンパク質をつくります。逆に、周囲に赤色光が多いときは、赤色光を吸収する光合成タンパク質をつくりま す。このような巧みな戦略によってシアノバクテリアは効率よく光合成を行っています(これを<mark>補色順化と呼</mark> びます)。この補色順化という現象は100年以上前から知られており、いくつかの光受容タンパク質によって コントロールされることが分かっています。しかし、その詳しいメカニズムは未だ謎に包まれています。

シンクロトロン光研究センターでは、共同研究者である豊橋技術科学大学の広瀬侑博士らとともに、この光 受容タンパク質の仕組みを解き明かすため、構造研究を進めています。そして最近、光受容タンパク質が緑色 光を感知したときの構造を観測することが出来ました。得られた構造情報を、他の実験方法(変異体実験・ NMR分光法・ラマン分光法・シミュレーションなど)と組み合わせて、シアノバクテリアが持つ巧みな戦略 "補色順化"のメカニズム解明に挑戦しています。

Structural analysis of cyanobacterial photoreceptive proteins

Raman spectroscopy, simulation) to reveal the mechanism

Certain cyanobacteria (prokaryotic photosynthetic organisms) perform photosynthesis efficiently (i.e., complementary color acclimation) by producing photosynthetic chromoproteins to absorb green light when there is mainly green light around them, also for red light in the same manner. This phenomenon, controlled by several photoreceptive proteins, has been known for over 100 years. However, the detailed echanism is still a mystery.

To elucidate the mechanism of this photoreceptive protein, the structural study has



been conducted through the collaborative research with Dr. Yuu HIROSE at Toyohashi University of Technology conducted at the Synchrotron Radiation Research Center. ------Recently, the structure of the photoreceptive protein when it senses areen light has been identified. With the obtained structural information, we have been trying to combine other experimental methods (e.g., variant experiment, NMR spectros



図S4. 新田州吾先生のパネル内容(展示パネル).

青色LEDの半導体材料「窒化ガリウム(GaN)」

"Gallium nitride (GaN)," the blue LED semiconductor material

赤﨑勇特別教授と天野浩特別教授は、名古屋大学にて、サファ イア基板上に高品質なGaN結晶の作製に世界で初めて成功しま した(1985年)。このGaN結晶を基板として「青色発光ダイオー ド(青色LED)」を開発(1989年)、そして実用化へと導き、2014 年のノーベル物理学賞受賞に輝きました。

「半導体」とは、金属のように電気を流す「導体」と電気を全く 流さない「絶縁体」の中間的な性質を持つ物質のことです。小さ なチップで、様々な電気的機能を発揮できるため、現代社会にお ける、光、通信、パワー制御の必須アイテムとなっています。

GaNに関する研究は、青色・白色LEDに代表される可視発光素 子分野のほか、最近では、よりエネルギーの大きい光を発生させ ることで、殺菌や物の加工に有用な紫外線LEDやレーザーの開 発も活発に行われています。

Dr. AKASAKI Isamu and Dr. AMANO Hiroshi succeeded in development of high-quality GaN crystals on sapphire substrate for the first time in the world at Nagoya University (1985). Using this GaN crystal as a a substrate, in 1989, they realized the blue light emitting diodes (blue LEDs), which led to its practical application, and won the 2014 Nobel Prize in Physics.

青色発光ダイオード(青色LEE

A "semiconductor" is a substance that has intermediate properties between a "conductor" that conducts electricity like metal and an "insulator" that does not conduct electricity. It is an indispensable item for optics, high frequency communications, and power control because it can perform various optical and electronic functions with a small chin

In addition to the field of optical applications represented by blue and white LEDs, by emitting light with higher energy, research on GaN has recently been actively developing ultraviolet LEDs and lasers diodes that are useful for sterilization and processing of objects.

発展形光源により会 世界の注障機を改算 0.0 大規元出力を効率 系統,実際に供給1

GaN デバイスが実現する未来社会の概念図

GaNは、5G、ポスト5Gの高速モバイル通信に欠かせない材料のみならず、パワー半導体としてSiを 審さ換えることにより 金工ネルギー 脱炭素さらにはエネルギーのインターネット化(InF)による 新しい社会のスタイル(Society5.0)を実現する為のキーマテリアルとしても期待されています。 ndispensable material for high-speed mobile communication (i.e., 5G and post 5G), but also expected as a key material to tyle (i.e., 5ociety 5) with energy saving, decarbonization, and further, the internet of energy (ioE) as a replacement of 51

本研究は文部科学者「省エネルギー社会の実現に食する次目代半導体研究開発」事業JPJ005357の助信を受けたものです。

共同研究者 本田 善央 HONDA Yoshio 田中 龍之 TANAKA Atsushi 出来 真斗 DEKI Menato 久志本 真希 KUSHIMOTO Maki 大野 法 AMAND Hrost

GaNの"きれいな"結晶をつくる

Making "high guality" GaN crystals

GaNは、自然界には存在しない材料です。基板となる結晶上 で、GaとNの原料ガスを1000℃以上の高温で混ぜることで、 無色透明で、堅く、安定な結晶ができます。しかし、パワー半導 体に求められる高品質な"きれいな"結晶を作るのは容易なこ とではありません。その技術開発が今進められています。

これまでは、サファイア(Al2O3)などの異種基板上に数μm ほどの薄いGaN層しか作れませんでした。しかし近年、技術の 向上により、そのおよそ1000倍である数mmの厚みの結晶を 作ることが出来るようになりました。より厚くて大きな高品 質結晶ができるようになれば、パワー半導体の性能とコスト を大幅に改善し、未来社会の実現に向け開発を加速させるこ とができます。

一方で、髪の毛の1/100~1/1000ほどの細さである、ナノ スケールの(小さな)結晶を作る技術も研究されています。こ の技術が応用できれば、例えば、マイクロLEDディスプレイの ような、次世代の超高精細ディスプレイ等の開発につなげる ことができるのです。

GaN is a material that does not exist in nature. By mixing the raw material gases of Ga and N on a substrate crystal at a high temperature of 1000°C or higher, colorless and transparent, hard and stable crystals can be formed. However, it is not easy to grow high quality crystals that are related to the quality of applications: the technological development is currently underway.

Only a few um of thin GaN laver had been formed on a sapphire (ALO) or foreign substrate. Recently, as the improvement of technology, the crystals with a thickness of several millimeters, which is about 1000 times more, have been produced. This will significantly improve the performance and cost of power semiconductors and accelerate the realization of a future society.

On the other hand, research for making nanoscale (small) crystals, which are about 1/100 to 1/1000 the size of hair, has also been progressed. If this is achieved, it will lead to the development of next-generation super high-performance displays, such as micro LED displays.







Nの成長街

GaNパワー半導体実現に向けた挑戦

Challenge toward the realization of GaN power devices

パワー半導体とは、発電所で電力エネルギーが生み出されて から、各家庭や身の回りの機器で使用されるまでの電力変換に 使用される半導体部品を指します。従来のシリコン半導体を縦 型GaNパワー半導体に置き換える場合、国内全消費電力に対 して約10%もの損失低減効果があると言われています。

一方で、GaN結晶には数種類の「転位(原子数個分(数nm)の ズレ)」と呼ばれる欠陥が存在しますが、大きな電力を扱うパ ワー半導体においては、その結晶中の転位密度を十分に小さく する必要があります。例えば、LED向けGaN結晶と比較するな ら、10000分の1以下に抑えなければなりません。特に重要な のは、「キラー欠陥」の特定と排除です。その起源と性質を突き 止められれば、より効果的にGaNパワー半導体の高品質化と 高信頼性を達成できます。

研究室では、雷流が流れないオフ(逆バイアス)状態のパワー 半導体をエミッション顕微鏡で観察し、欠陥部分での"漏れ電 流"による発光を確認しています。この発光部分にどのような 転位・欠陥があるかを調べるため、結晶表面を水酸化カリウム (KOH)融液で溶かすと、転位を起点としたエッチピットが形 成され、位置と大まかな種類が特定できるようになります。さ らに、透過型電子顕微鏡(STEM)や3次元アトムプローブ (3DAP)などを用いて、詳細な解析を行っています。



GaN基板の新面図





エッチピット後のGaN結晶表面

始長の美国をKOHなどで限かすと形成される

EM image of GaN crystal surface after the defe will thin mathed (atched) method)

w and shape of atch pits, forward using motion KDH, a

(電子顕微鏡写真)

A power device is an electronic device used for power transmission from the power energy generated at power plants to the power for light and devices in homes. Replacing conventional silicon semiconductors to GaN power devices is expected to have approximately 10% of electric energy-loss reduction for the total domestic consumptio

On the other hand, GaN crystals have several types of defects called "dislocations (misalignment of several atoms [a few nm in On the other hand, Gaix Crystein have several sypes or events Gaited on obscillations (imsaing) of each of several atoms (a leaf with in size])" in power semiconductors that handle large an events of electric power, the density of dislocations in the crystal should be significantly reduced. For example, compared to GaiX crystals for LEDs, it must be less concentration than 1/10000. Uptividant importance is the identification and elimination of Waller defects. If the origin and properties are revealed, the quality and reliability of GaN power devices will be achieved more effectively.

In the laboratory, the power semiconductors in the off (reverse biased) state where no current flows have been observed by In the laboratory, the power sector of the s hydroxide (KOH) can specify the position and dislocation types. In addition, detailed analysis for the specified defects is lectron microscope (STEM) and a three-dimensional atom probe (3DAP)



図S5. 宇治原徹先生と石川晃平先生のパネル内容(展示パネル).

次世代パワー半導体「炭化ケイ素 (SiC)」

"Silicon carbide," a next-generation power semiconductor

金属のように電気をよく通ずものを「導体」、電気をほとんど通さないものを「絶縁体」と 言いますが、「半導体」は導体と絶縁体の中間的な性質を持つ物質のことを言います。例を挙 げると、パソコンなどの「0」と「1」のデジタルデータは、半導体が電気を通したり、通さな かったりする性質を利用しています。

このように半導体は私たちの身の回りで不可欠な材料ですが、中でも、炭化ケイ素(SiC) は、次世代パワー半導体として注目を集めています。現在主流のシリコン(Si)半導体と比較 するなら、SiC半導体は高温、高電圧下でも有効のため、例えば、電気自動車などに用いられ る直流交流変換装置(インパータ)への利用が期待されています。さらに、SiCインパータを 利用するなら、Siインパータと比較して70%の電力損失低減が可能であるため、省エネ効果 にもつながるのです。

A substance that conducts electricity well, such as metal, is called a conductor, while a substance that conducts almost no electricity is called an insulator. A semiconductor is a substance that has intermediate properties between a conductor and an insulator. For example, "0" and "1" digital data expressed in computers use the semiconductor's property of conducting or not-conducting electricity.

Silicon carbide (SiC), among semiconductors, is now expected as a next-generation power semiconductor. For instance, compared to the current mainstream silicon (Si) semiconductors, SiC semiconductors are effective even at high temperature or high voltage: the demand for DC/AC converters (Inverters) used in electric vehicles is increasing. Furthermore, SiC inverters can reduce power loss by 70% compared to Si inverters, expected to save the energy.



SiCパワー半導体による次世代の電力変換器(インパータ)の革新と導入に向けて

SiCの結晶成長方法

Crystal growth methods of SiC

SiCは、常圧で融点を持たず、高温で昇華分解します。その ため、SiC結晶は、その原料粉大をおよそ2400℃の高温で昇 華させ、低温部のSiCの種結晶上に結晶化させる手法(昇華 法)によって生産されています。一方で、この種結晶中の結晶 構造に乱れ(欠陥)があると、SiCの品質に影響してしまう、 という難しさがあります。

そこで、より欠陥が少ない高品質なSiCを得るため、溶液 成長法(溶液法)の研究が進められています。

溶液法は、ケイ素(融点1414'C)の融液に炭素を溶解させ た後、低温にすることで、SICとして析出する方法です。昇華 法と比べて低温で行えるのみならず、これまでにも、高品質 なSIC結晶を得ることに成功しています。

SiC does not have a melting point at ordinary pressure and sublimates and decomposes at high temperature. Therefore, SiC crystals are usually produced by a sublimation method in which the raw material powder is sublimated at a high temperature of about 2400°C and crystalized on the SiC seed crystals under low temperature. On the other hand, if there is a disorder (defect) in the crystal structure in the seed crystal. Taffects the quality of SiC applications.

In order to obtain highly pure SiC crystals with fewer defects, research on the solution growth method has been underway. In the solution method, carbon is dissolved in the silicon melt (the melting point of Si is 1414°C) and then it is cooled to low temperature to precipitate as SiC. Unlike the sublimation method, high-quality SiC crystals have successfully been obtained even performed at lower temperature.







and the second state of th

AI 技術を利用:溶液成長法の実用化に向けて

Utilizing AI technology: Toward the practical application of the solution growth method

SIC溶液成長法の実用化に向け、研究室レベルの実験を産業 レベルに展開するためには、結晶成長に必要となる炉や部材 も大型化(大口径化)する必要があります。しかし、実験のコス トが大きく上昇するほか、結晶成長における実験パラメー ターは、その膨大な組み合わせを検討しなければなりません。

最新の研究では、SiCの溶液成長法の大口径化に向け、より 効率的な実験を行うため、人工知能(AI)を用いています。仮想 実験を組み立て、SiCの結晶成長における実験パラメーターを AIが予測し、数値シミュレーションによる実験を繰り返し行 います。

これまでに、AIはシミュレーションの結果を驚くほどに正 確に予測したほか、数値シミュレーションには平均3800秒 (およそ1時間)ほどかかるのに対し、機械学習による予測時間 は平均で0.0003秒であり、非常に高速に炉内の温度・流速分 布を予測することができました。

In order to develop laboratory-level experiments toward the practical applications of the SiC solution growth method at the industrial-level, its necessary to increase the size of diameter of the furnaces and to make larger components for the crystal growth. However, the cost of the experiments increase dynamically, and the experimental parameters for the crystal growth must be considered in a number of the combinations.

The latest research uses artificial intelligence (A) to conduct more efficient experiments for the SiC solution growth method with the size larger in diameter. The experiments by numerical simulation are repeatedly performed: a virtual experiment is assembled, then A1 predicts the experimental parameters in the crystal growth of SiC.

So far, Al has predicted surprisingly accurate simulation results. Furthermore, while numerical simulations took an average of 3800 seconds labout 1 hourj for calculation, machine learning resulted within 0.0003 seconds on average, leading to the prediction of the temperature and flow velocity distribution in the furnace at extremely high speed.







Seconda, Vandas, et al. "High-speed prediction of computational fluid dynamics simulation in cypral pro Controllocitions 20.41 (2016) 45(4):45(4))

宇治原徹教授

図S6. 松田亮太郎先生と日下心平先生のパネル内容(展示パネル).

たこうせい きんぞく さくた 結晶構造が変化する!?「多孔性金属錯体(MOF)」

"Metal organic framework," the transformative crystal structure



MOF(モフ)は、金属イオンと有機配位子が規則正しく配列することによってできる 結晶で、機能性材料として注目を集めています。特徴は、その結晶構造にあります。

- 1. 金属イオンと有機配位子の骨格構造が、均一なナノサイズの細孔(ナノ空間)を形成し ます。この空間で、ねらった分子などの貯蔵やふるい分け(分離)、またイオン交換などが 可能です。
- 2. 他の多孔性材料(ゼオライトなど)と異なり、配位結合という結合様式により結晶構造 の骨格が柔らかいため、結晶を取り巻く環境の変化に応じて、穴のサイズを変えること ができます。
- 3. 求める機能に合わせて、金属イオンと有機配位子の組み合わせから、構造や性質を自由 にデザインすることが可能です。これまでに80,000種類以上のMOFが報告されてい ます。

Metal-Organic Frameworks (MOFs) are crystals composed of an infinite network of metal ions and organic ligands. The main feature of MOFs is due to its crystal structure:

1. The framework structure of metal ions and organic ligands forms uniform nano-sized pores (i.e., In this space, it is possible to store targeted molecules, also to be used for molecular-sieving

(separation) or ion-exchange.

2. Unlike other porous materials, such as zeolites, the frameworks of MOF crystals are soft or flexible due to the coordination bond, which makes the pore-sizes change depending on the environment surrounding the crystals

3. The structures and properties are freely designed from the combination of metal ions and organic ligands for

desired function. So far, more than 80,000 types of MOFs have been reported.

MOFの研究:ガスの貯蔵と分離

MOF function in research: Gas storage and separation

アセチレンガスの貯蔵

アセチレンガスは、溶接用バーナーの燃料やプラスチックの 原料などに使われています。一方、アセチレンガスは、空気や酸 素の混入がなくても、圧力をはじめ、発火エネルギーが加わる と爆発してしまうため、貯蔵や運搬の際は、規則を守り、細心の 注意を払って行う必要があります。

このような背景のもと、アセチレンガスを安全に貯蔵するこ とができるMOFが開発されました。MOFを使うことで、アセチ レンガスを大気の400倍の圧力に相当する密度にすることが できます。

Acetylene storage

Acetylene gas is used as fuel for welding burners and as a raw material for plastics. On the other hand, acetylene explodes when pressure or other ignition energy is applied (e.g., by storing or transporting it) even if it is not mixed with air or oxygen.

For this problem, a MOF, which can safely store acetylene gas, has been developed. By using the MOF, it is possible to make acetylene gas a density equivalent to 400 times of the atmospheric pressure.

一酸化炭素のみを選択的分離

一酸化炭素は、樹脂などの化学製品を作るために使われてい ます。それには、高い純度の一酸化炭素が必要ですが、一酸化炭 素と窒素ガスは混入してしまうと、互いの分子の大きさがほぼ 同じため、これらガスを分離することは難しいとされています。

これに対し、一酸化炭素と窒素の電気的性質の違いに着目し て、kagomé-MOFが開発されました。一酸化炭素の電気化学的 な力があれば、孔への通り道である弁が開かれ、一酸化炭素のみ を選択的に取り込むことができます。



アセチレンを取り込んだMO

Selective reparation of carbon monoxide only

Carbon monoxide is an important material required to

obtain chemical products, such as resins. High-purity

if carbon monoxide and nitrogen gas are mixed in, it is

difficult to separate these gases because their

To deal with this problem, kagomé-MOF was

developed focusing on the difference in electrical

properties between carbon monoxide and nitrogen

The electrochemical power of carbon monoxide opens

"valves" that are the path to the pores, allowing only

carbon monoxide to be selectively accommodate

carbon monoxide is required for its utilization; ho

molecular sizes are very similar.

MOFの研究:光反応による酸素の分離

MOF function in research: Separation of oxygen by photoreaction

水の中には酸素が溶けています。水中の酸素は魚が 生きていくために非常に重要です。一方で、水中に溶け ている酸素はボイラーの配管を錆びさせるなど私たち の生活に害をもたらすこともあります。しかし、水中に 溶けている酸素を直接見ることはできませんし、それ を取り除くことはさらに困難です。そのため、水中から 酸素を取り除くための技術が開発されていますが、有 害な物質を使っていたり、使いまわすことができな かったり、課題が多く残されています。

こうした課題を解決すべく、光を当てるだけで、水の 中に溶けている酸素のみを選択的に吸着する新しい MOFが開発されました。空気中で、酸素と共存する窒 素や二酸化炭素などの気体を吸着することもありませ ん。気体の分離には、通常、膨大なエネルギーが必要で すが、MOFを使うことで、省エネにも貢献できるとし て、産業界などから注目されています。



ガス分子を補捉するMOFのイメージ間

Oxygen dissolved in water is necessary for fish to survive, while it can cause some problems, s rusting metals. One of the difficulties is that the d in water cannot directly be observe or rather removed. Although some technology to remove oxygen from water has been developed, there are many problems remained, like harmful substances used or impossibility of reuse.

MOFが酸素を吸着および放出する時の構造変化

To solve this problem, a new MOF has bee so that it selectively adsorbs only oxygen in water simply by exposing it to light. It does not adsorb gases such as nitrogen and carbon dioxide that co-exist with oxygen in the air. Gas separation usually requires a huge amount of energy, but the use of MOF is attracting attention from industry and others as it can contribute to energy saving.





時間 [分] Terr

図S7. 瀬川泰知先生と坂本裕俊先生のパネル内容(展示パネル).

立体構造がカギを握る「有機化合物」

"Organic molecules" and their three-dimensional structures

有機化合物には、原油、食物、木材、皮革など、生物を由来とする天然有機化合物と、プラ スチック、医薬品、塗料など、人工的に作り出した人工有機化合物があります。どの有機分 子もその立体的分子構造に独特な機能が備わっています。

例えば、医薬・農薬・香料などの生理活性物質には、右手と左手のように、鏡に映した時の 自身の鏡像を重ね合わせることができない性質(キラリティ)が存在します。こうした立体 的な構造の違いは、香りや味、薬効や毒性・副作用として生物に影響を与えるのです。

したがって、有機分子を望み通りに設計し合成する際には、結晶として精製し、X線結晶 構造解析によってその立体構造を明らかにしていきます。有機分子の立体構造が分かれ ば、「なぜこのような性質をもつのか」という疑問の解決につながり、また「次はもっとこう いう性質をもつ分子をつくろう」という新たな研究がスタートできるのです。



メントールの立体構造とそれらの香味の違い



For bioactive substances, for example, some pharmaceuticals, agricultural chemicals, and fragrance are known to have the property (chirality) that they cannot superimpose their own mirror image in the same manner of the right hand and the left hand. These differences in three-dimensional structures affect living organisms, appearing as aroma or flavor, and medi properties or toxicity/side effects

Therefore, when artificially designing and synthesizing molecules as expected, researchers obtain crystals and identify their three-dimensional structures by X-ray crystal structure analysis. If the three-dimensional structure of an organic molecule is evealed, it will lead to the answer of the question: "why does it have such properties?" Then, a new research will begin to synthesize a molecule with desired properties!



Synthesis of "molecular nanocarbons" by design and structural analysis

グラフェンやカーボンナノチューブなど、ナノメートルサ イズの周期性をもつ炭素物質を「ナノカーボン」と呼びます。 熱や電気を通しやすく、軽量かつ高強度の次世代材料として 期待されている物質です。

ナノカーボンは、その分子構造により電子的・機械的性質に大 きな違いがあるため、望みの性質をもつ構造を狙い、精密に合 成する必要があります。そのため、ナノカーボンの部分構造と なる分子(分子ナノカーボン)に着目し、複雑な幾何学構造(ト ポロジー)をもつ「トポロジカル分子ナノカーボン」を生み出 すべく、研究が進められています。

これまでに、カーボンナノチューブの部分構造分子である筒 状の分子ナノカーボンの合成、単離、そして、X線結晶構造解 析を用いた構造決定に成功しています。さらに、3次元的に入 り組んだ構造として、結び目(ノット)や絡み目(カテナン)を もつ分子ナノカーボンを合成し、単離、そしてX線結晶構造解 析により、その構造が明らかとなりました。

Carbon substances with nanometer-sized periodicity, such as graphene and carbon nanotubes, are called nanocarbons. They are expected as next generation materials as they easily conduct heat and electricity with light-weight and high-strength characteristics.

Since nanocarbons have large differences in electronic and mechanical properties depending on the molecular structure, it is necessary to synthesize a particular one with desired properties Therefore, the synthesis of "molecular nanocarbons," the partial structures of nanocarbons, are the key to progress research. Further, to handle multiple structural aspects, the generation of "topological molecular nanocarbons" has been achieved for the synthesis of long-sought nanocarbons.

tubular molecular nanocarbons, which are partial structural molecules of carbon nanotubes, and determining the structure using X-ray crystal structure analysis. Furthermore, they synthesized and revealed the three-dimensionally intricate structures of molecular nanocarbons with knots and links (catenane) by means of X-ray crystallography.



代表的なナノカーボンとそれらの部分構造である分子ナノカーボ:





Strategy for the synthesis of all-benzene catenane and the trefoil knot

分子ナノカーボンが集まって、新しい機能をもつ材料に New materials made from molecular nanocarbon assembly

カーボンナノリングの"あな"でつながる

リング状の分子ナノカーボンの"あな"を利用することで、様々な現象を起 こすことができます。例えば、この"あな"にヨウ素を取り込み、電圧をかけ続 けると、中のヨウ素がつながったワイヤー状の物質を形成します。

このリングとヨウ素の複合体は、電気刺激により、電気伝導性をもつよう になり、同時に白色発光することが分かりました。分子ナノカーボンの集積 構造により、これまでにない刺激応答による機能発現が見出されたとして 注目を集めています。

Connecting the holes of ring-shaped molecular nanocarbon

Various phenomena can be happened, for example, by using the empty space of ring-shap lar nanocarbons. If iodines are taken into the holes and a voltage is continuously applied the indine inside will form a wire structure

It was found that the ring-iodine complex became electrically conductive by electrical stimulatio and at the same time emitted white light. Such a stimulus response function is attracting industrial ecedented phenom na due to the integrated structure of molecular na





分子の凹凸で二重らせんが組み上がる



炭素のシートを積み重ねるといろいろな機能が発現しますが、大きく曲 がった炭素シート(湾曲分子ナノカーボン)同士を積み重ねることは難しい とされていました。

そこで、凹凸がお互いにキレイに組み上がるような湾曲分子ナノカーボ ンを設計し合成したところ、分子同士が自発的に積み重なりナノワイヤー を形成しました。ナノワイヤーはとても細いためX線測定では構造が分かり ませんでしたが、電子回折結晶構造解析という新しい手法によって、隙間な く組み上がった美しい二重らせん構造であることが明らかになりました。



治由ナノグラフェンが実殖した二重らせんナノファイバーの構成

凹凸で分子を整列させるブロック遊びのような方法は、繰り返し利用可 能な導電ワイヤーなど様々な分野での応用が期待されています。

curved molecular nanocarbons into double-helix nanofiber

While stacking carbon sheets produces various functions, it was considered difficult if the sheets vere curved (i.e., curved molecular nanocarbons)

To cope with this problem, a new curved molecular nanocarbon, in which the converof molecules align with each other to assemble, was designed and synthesized, resulting in forming on movies via piling up the molecules spontaneously. Since nanowires are too thin to analyze the structure by means of X-ray measurement, a new method called electron diffraction crystal structure analysis revealed that the nanowire forms a perfect double-helix structure without gaps

By using the method that align the convex/concave pair of molecules like building blocks, functions may vary, for example, reusable conductive wires are expected for application use.







オールペンゼンカテナンとオールペンゼンノットの合成戦略

So far, researchers have succeeded in synthesizing and isolating

坂本裕俊

瀬川泰知グ

図S8. 参加者の言葉「わかったから,知らせたいこと」 (関連イベント「結晶編集室(仮)」より).















0 わかったから、知らせたいこと この展示をみて 上朝 も(カルサイト) こんなことがわかったから、みんなに知らせたい! お酸カルシウム かってきた 解めて 万万万、原湖 やもある。 万原石が、反カヤ 読で度ドニルろ=シにす。7 大理戸かりまたる、 「おおなかいを ウムノマ 大きまを スクトレーモ サメントヤをあったわかりにも使いれる









(わかったから、知らせたいこと この展示をみて 兵吉 品の 体育をコーナー こんなことがわかったから、みんなに知らせたい! 話品のは様から成長していてもので るみかご研究者には子供のようた感 いろのかがおもしろいて思った。 0 わかったから、知らせたいこと この展示をみて 吉田教授・科市教授の展示など こんなことがわかったから、みんなに知らせたい! 私たちの体の中も、色のな技術を建物 などにも含まれていたり、三方用されていたりする → 義言品のは 私たちのとって 外近な存在!



図S9. 参加者の言葉「気になったけど,わからなかったこと」 (関連イベント「結晶編集室(仮)」より).





























こんなところがわからなかった

THAZ"

どけだいのか



